

西光寺納骨塔と肥前療養所の戦争神経症兵士

— 佐賀県吉野ヶ里町の戦争遺跡 —

伊藤 慎二

はじめに

佐賀県は、近現代戦争遺跡の分布や現状が九州沖縄でもっとも詳細不明な地域である¹⁾。しかし、陸軍の目達原^{め たばる}飛行場など重要な軍事施設も知られており、今後の調査で佐賀県内からも数多くの戦争遺跡が把握されると考えられる²⁾。

そうしたなかで、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町には、日本軍の「戦争神経症」³⁾兵士に関連する全国的にも稀有で重要な意義をもつ戦争遺跡が現存する。日本軍の戦争神経症兵士については、おもに国府台^{こうのだい}陸軍病院（千葉県市川市：現・国立国際医療研究センター国府台病院の前身）の「病床日誌」などの分析から近年研究が進み、社会的に広く関心を集めている。しかし、これらに関連する戦争遺跡の事例は、その多様な意味での「不可視」の性格から、ほとんど知られていない。そこで小論では、西光寺納骨塔とそこに葬られた肥前療養所の戦争神経症兵士に関する基礎的情報を整理し、その意義と課題を考える。

1. 西光寺納骨塔

浄土宗紫雲山西光寺（吉野ヶ里町三津1013）は、1837（天保8）年と記された棟木を持つ本堂建築が残る地域の古刹である（武廣編 1982：994-995頁）。山門と本堂の間の境内中央には、1965（昭和40）年に建立された地域出身の戦没者（三津地区38名・石動地区9名・神埼町20名）を追悼する「英霊塔」があ

る。境内西側半分は一段小高い墓地になっており、山門の真横にあたるその南端石垣中段に、寺域外側正面に向かって1基の納骨塔が建てられている（図1～3）。

これは、おもに戦争神経症などの精神疾患（精神障碍）で療養中に死去した旧日本軍兵士（未復員兵）の遺骨を納めた納骨塔である。近隣の肥前療養所（現在の肥前精神医療センター）に戦後間もない時期に入所し、さまざまな理由で親族と没交渉や帰宅を拒まれたまま死去し、引き取られることなく無縁化した遺骨がここに納められた。肥前精神医療センター関係者と西光寺により供養が続けられている。

細砂礫が多く混じるコンクリート製の塔身に相当する納骨室上に、円盤状の自然礫を3段積み重ねた露盤を設け、さらにその上に精細に加工した石製の覆鉢・請花・九輪・宝珠からなる相輪が載せられた宝篋印塔ほうきょういんとうを模した形態である。九輪部分西側の上から3段目から7段目には、梵字が1字ずつ合計5字刻まれている。納骨室の西向き正面には額状に「納骨塔」、南側面にも額状に「寄附者芳名」銘板がはめ込まれ、東側裏面に収納扉が設けられている。銘板には以下のように寄附者名などが刻まれ、地域と肥前療養所職員の篤志によって、敗戦直後の物資窮乏期の1947（昭和22）年12月にこの納骨塔が建立されたことが分かる（図3）。

国立肥前療養所	昭和二十二年十二月建立	国立肥前療養所職員	島	白	富	西	東	佐	寄附者芳名
			田	石	士	光	脊	賀	
			●	精	ト	振	村	縣	
			●	三	ラ	婦	人		
					ツ	會	會		
					ク	寺			
					株				
					式				
					會				
					社				

この納骨塔の建立経緯は、国立肥前療養所の『創立三十周年記念誌』中で、嶋賢氏が「無名戦士の墓」という一文で紹介している（鮫島ほか編 1978：20頁）。それによると、西光寺住職作田法観氏が敷地を提供し、当時厚生省から



図1 西光寺正面全景（左側石垣上に納骨塔） ※筆者撮影



図2 西光寺本堂 ※筆者撮影



a. 西側正面



b. 南面



c. 南面の「寄附者芳名」銘板

図3 西光寺の納骨塔 ※筆者撮影

派遣された療養所建設技師の杉光次氏の設計で、関係者の協力を得て肥前療養所全職員の奉仕で「五輪塔の無名戦士の慰霊塔」が建立されたという。そして、「今この慰霊塔に何体の遺骨が眠っているか、開所後第一回目に収容したのは、南方から復員してきた白衣の勇士だった。その患者の中には言葉の分らない南方現住民と目される人が二名程居たと記憶しているが、言葉が通ぜず通訳の出来る人をさがしたが遂にさがし得なかった。家族との連絡がとれないまま、死亡する患者もいて、先の現住民の患者もその一人であった。とりあえず遺骨は西光寺に安置してもらったが数がふえるにつれ、無名戦士慰霊塔建立と相成った次第である。以来お盆には盛大そして厳粛な供養を営んだ」（鮫島ほか編 1978：20頁）という。

つまり、納骨塔に納められたのは、精神疾患を患い親族との連絡が途絶えた旧日本軍兵士の遺骨のみでなく、南方戦線現地での軍属と推測される患者の遺骨も少数含むようである。

2. 肥前療養所

国立病院機構肥前精神医療センター（吉野ヶ里町三津160）（図6）は、戦時に建設計画が立案された傷痍軍人肥前療養所がその後改称発展した施設である。故中村哲医師（1946年－2019年）の最初の勤務先としても知られる。

1938（昭和13）年に厚生省外局として傷兵保護院（軍事保護院）が設置され、戦争拡大にともない精神疾患を有する兵士が増加したため、軍事保護院官制第5条により傷痍軍人精神療養所の開設が決定された。1940（昭和15）年12月武蔵療養所（東京都小平市：国立精神・神経医療研究センター病院の前身）が設置され、1943（昭和18）年度になると九州地区にも整備費が計上された。当初の開設候補地は福岡県であったが、佐賀県出身の軍事保護院大坪保雄業務局長の奔走により、1943（昭和18）年7月に佐賀県神埼郡東脊振村（現吉野ヶ里町）に設置が決定した。同年10月より用地買収を開始し（総面積75537.17坪：当初計画定床800）、1944（昭和19）年1月15日から建物の工事に

着手し、1945（昭和20）年10月22日に傷痍軍人肥前療養所（定床500）が創設された。そして、1945（昭和20）年12月1日に厚生省に移管され、国立肥前療養所（定床300）に改称し、傷痍軍人のみでなく、復員者・引揚者その他一般の精神疾患患者の受け入れを開始した。1946（昭和21）年3月に傷痍軍人肥前療養所として計画された建物などがすべて竣工した（図4・5・8）（鮫島ほか編 1978）。2004（平成16）年に、現在の国立病院機構肥前精神医療センターとなった。

傷痍軍人肥前療養所として計画・建設された建物は現存していない。しかし、構内東北部の煙突は、1947（昭和22）年当時とほぼ同じ位置にある。また、構内中央部を南北方向に走る丘裾の道路東側に一部空堀状の地形（図7）がみられる。敷地東端を区切る導師川とともに、あるいは病棟地区の西端を区切っていた初期の境界施設痕跡の可能性もある。

肥前療養所への戦争神経症兵士の入所は、創設と同時に始まった。大分県竹田市の中学校・国民学校を接収改造して1945（昭和20）年8月に半月ほど稼働した竹田陸軍病院の150人ほどの患者の中から、帰郷させることができない患者を敗戦後に肥前療養所へ送ったという（桜井 1966：74-79頁）。その数は30名ほどであったが、同年9月16日の「枕崎台風」で肥前療養所の建物が大破したため、小倉と熊本の陸軍病院に患者を移送し、同年12月5日の建物修復後に再開したという（鮫島ほか編 1978：4頁）。1946（昭和21）年頃は、佐世保港に到着した復員兵の患者が多かったようである（鮫島ほか編 1978：14頁）。

創設初期の状況については、看護婦として勤務していた安永トミエ氏の証言（鬼嶋・吉岡監修 2016：124頁）がある。1945（昭和20）年11月頃は木造の長屋が一つ二つあるだけで、医師や看護婦20人ほどは寺や倉庫などに宿泊していた。

「年が明けたぐらいから、患者が次々と入ってきた。戦地から引き揚げてそのまま来たのだろう。汚れた軍服をまとめてやつれた姿が哀れでね。風呂に入れるために脱がせると、軍服の縫い目にシラミとその卵がびっしり詰まっていた。

所管換当時の建物配置図（昭和22年当時）

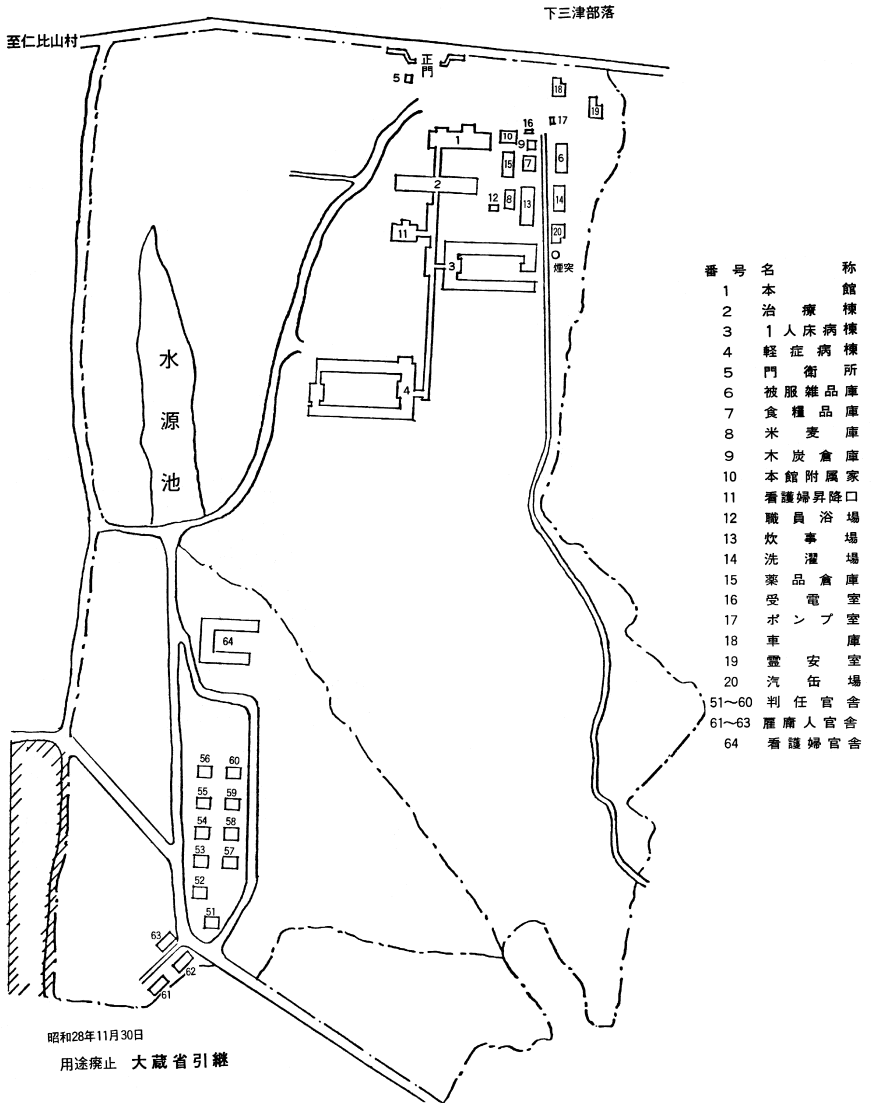


図4 1947（昭和22）年当時の国立肥前療養所施設配置図
出典：（鮫島ほか編 1978：95頁）



図5 1948（昭和23）年4月9日米軍撮影の国立肥前療養所航空写真
※国土地理院所蔵 USA-R242-No2-138

患者さんたちはちょっと見は普通だけど、みんなどこかおかしくて、急に暴れ出したり、呼び掛けても全く返事をしない人もいた。治療らしい治療はできず、彼らの話相手をするしかなかった」(鬼嶋・吉岡監修 2016:124頁)。

また、『佐賀新聞』2015(平成27)年12月9日付1頁「肥前療養所へ復員兵次々 さが70年の来歴特別編 心と向き合う(1)」記事によると、「重症の人は個室に収容されていて、格子戸越しにおにぎりをあげた。鍵がかかっている、時々ガチャーン、ガチャーンという音が聞こえ」と、元看護師が証言している。

開設直後は、劣悪な食糧事情のため、入所患者の多くは栄養失調状態に陥っていた(鮫島ほか編 1978:48頁)。1945(昭和20)年12月の発足当時は、食事は一日一食だけ米飯で、米飯には里芋・馬鈴薯・甘藷をたくさん混入し、他は丸パンや雑炊であった。南瓜や甘藷の茎も重要な副食であった。職員のみでなく作業可能な病棟の患者も、これらの栽培や豚・鶏の飼育に携わったとされる(鮫島ほか編 1978:104頁)。

厳しい食糧事情により、多くの死者も出た。1945(昭和20)年～1949(昭和24)年にかけての各年の年間死亡数(括弧内は、年間入所者数)(鮫島ほか編 1978:141頁第3表)は、以下の通りである。1945(昭和20)年3人(55人)、1946(昭和21)年66人(408人)、1947(昭和22)年104人(341人)、1948(昭和23)年37人(225人)、1949(昭和24)年30人(232人)と、特に1946・47年に多数の死者が集中している。こうした状況のなかで、近隣の西光寺に納骨塔が建立されたのである。

元兵士の各年度における正確な入所患者数は不明である。しかし、国立肥前療養所の『創立50周年記念誌』に示されている1950(昭和25)年以降の5年ごとに集計された「診療費支払方法別入所患者数」表の「戦傷病者特別援護法」費目欄の以下の数字が参考になる。1950(昭和25)年40人、1955(昭和30)年27人、1960(昭和35)年21人、1965(昭和40)年41人、1970(昭和45)年39人、1975(昭和50)年36人、1980(昭和55)年31人、1985(昭和60)年26人、1990(平成2)年24人、1995(平成7)年12人となっている(平野ほか 1996:



図6 国立病院機構肥前精神医療センター正面現状 ※筆者撮影



図7 肥前精神医療センター・旧病棟地区西端の空堀状地形 ※筆者撮影

昭和20年代 食べることに追われた時代



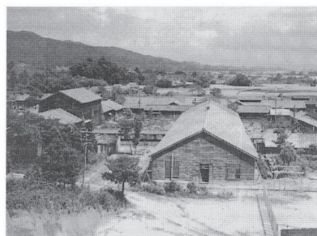
正面玄関と事務本館

S 25. 1



玄関車寄せ

S 25. 9



本館(左)と治療棟(中央)



食堂(中央)と東2病棟



閉鎖病棟 S 29当時

図8 1950年代の国立肥前療養所 出典：(平野ほか編 1996：237頁)

210頁第11表)。また、『佐賀新聞』2015(平成27)年12月9日付1頁「肥前療養所へ復員兵次々 さが70年の来歴特別編 心と向き合う(1)」記事中の肥前療養所元副所長・鮫島健氏の証言によると、1967(昭和42)年当時の入所患者(病床数550)の1割ほどが戦地で発症した元兵士だったとされる。そして、退所者も、親類や地域の偏見により、故郷に戻った例は無かったという。

つまり、1950年～1995年頃にかけて、常時数十人程度の元兵士の患者が入所していたとみられる。そして、これらの数字の背後には、境界的・部分的・無

自覚的に戦争神経症に近接した心的外傷を負ったさらに膨大な数の元兵士が、療養所外側の一般地域社会で他者の偏見を恐れながら生活していたことも想像に難くない。

肥前療養所入所患者の戦争神経症に関連する具体的な状況や要因については、まだ詳細な全体像が明らかでなく、今後の研究の進展に待たれる部分が多い。しかし、いくつかの関係者の証言記事や、肥前療養所所属研究者の論文から、断片的にうかがい知ることができる⁴⁾。

『西日本新聞』2015（平成27）年5月31日付16頁「精神障害、かなわぬ〈復員〉 肥前療養所に長期入院」記事では、自殺願望と推測される体温計をかみ割る元兵士や、電気ショック療法を拒み暴れる過酷な戦場体験の後遺症を負ったとみられる元兵士の例を、手塚ツタエ氏などの元看護師が語っている。

また、国立肥前療養所医師の橋口茂氏の「精神病を佯詐せる2例」（橋口1950）という論文は、1946（昭和21）年5月にラバウル（パプアニューギニア）から復員した元兵士について取り上げている。元兵士は、復員後、妻子のいる佐賀で暮らしていたが、実子を虐待・暴行死させた。刑務所を経て肥前療養所に入所し、大砲の音や爆発音などの幻聴、「大勢の人がいる、日本海軍です」などの幻視を訴え、また他患者に暴言や殴打を頻繁に行ったという。ただし、橋口氏は、この事例について、元兵士がマラリア熱罹患を口実にする傾向があることから、戦争神経症の疑問例としている。

同じく国立肥前療養所医師の吉村正氏は、「18年間入院していた精神分裂病者を社会復帰させた経験」（吉村 1966）という論文で、フィリピンで敗戦後にアメリカ軍捕虜となった元陸軍一等兵（未復員兵）の事例を紹介している。アメリカ軍の使役に従事中、1946（昭和21）年6月20日に上官と争い強い制裁を受け、そのまま昏迷状態をつづけ「記銘力減弱・理解力不能」となり、フィリピンと日本国内のいくつもの病院を転院し、肥前療養所に入所した。その後、18年間の療養生活を経て回復し、兵役応召以来21年5か月振りに、退所・復員できた事例である。

肥前療養所入所中は、次のような言動・症状がみられたという。終日病棟の入口に立って一点をみつめる。わずかなことに立腹して他の患者をなぐる。軍人勅諭をよく憶えほとんどまちがいがなく暗誦する。病棟扉の前に立ち、出入りの職員に軍隊式の礼をする。作業指導員に突然お前は死刑だ、隊長命令であると、今にも叩きかからん見幕を示した（吉村 1966：88-89頁）、などである。

まとめ

アジア太平洋戦争期の大日本帝国は、戦時精神神経疾患の専門治療施設である国府台陸軍病院（千葉県市川市・1938年以降特殊病院）を拠点に、長期療養が必要な特に統合失調症（精神分裂病）などの精神疾患兵士に対して、武蔵療養所（東京都小平市・1940年開設）や下総療養所（千葉県千葉市・1944年以降受入）などの傷痍軍人療養所を設置した（諏訪編 1966, 浅井編 1983, 清水編 2006, 中村 2018）。そして、九州地方では、おもに小倉陸軍病院（北九州市小倉南区：国立病院機構小倉医療センターの前身）⇒国府台陸軍病院という体制であった。しかし、戦争末期の患者数の増加と交通移動の困難さ⁵⁾に応じて、竹田陸軍病院（大分県竹田市）・肥前療養所という体制への移行が進められたが、その完成を前に敗戦となったようである。

日本軍兵士の戦争神経症に関する戦後の研究は、戦犯追及を恐れた敗戦時の閣議決定による公文書焼却湮滅（吉田 1997, 溝部 1998）をかりうじて免れた国府台陸軍病院の「病床日誌」が基になっている（浅井編 1983）。その後、同「病床日誌」を分析した清水寛らは、戦争神経症の発症経緯を次の6種類に分類している。(a) 戦闘行動での恐怖・不安によるもの（戦闘恐怖）、(b) 戦闘行動での疲労によるもの（戦闘消耗）、(c) 軍隊生活への不適応によるもの（軍隊不適応）、(d) 軍隊生活での私的制裁によるもの（私的制裁）、(e) 軍事行動に対する自責感によるもの（自責感）、(f) 加害行為に対する罪責感によるもの（加害による罪責感）である（清水編 2006：231-246頁）。肥前療養所に入所していた元兵士の多くも、これらに該当するものと考えられる。

最近では中村江里氏が、国府台陸軍病院のみでなく、新たに新^{しばた}発田陸軍病院（新潟県新発田市）や神奈川県・山形県の民間精神病院の事例の分析から、戦争とトラウマ（心的外傷）に関する詳細な研究成果をまとめた（中村 2018）。日本軍兵士の戦争神経症は、「恐怖を言語化することが憚られた社会において彼らが発した〈言葉〉だった」（中村 2018：309頁）とされる。そして、戦後社会でそれらが「不可視化」された要因のひとつとして、「〈人を殺せる〉兵士こそが〈正常〉であるという圧倒的な価値体系のもとで生きなければならなかった元兵士の中には、そうした軍隊の論理と、個人の良心や戦後の市民社会における加害行為を否定する論理とのギャップ」（中村 2018：292頁）があったことをあげている。日本帰還後も、戦場での過酷な経験で容易に癒えることのない戦争神経症を負い、戦地の実情を知らない家族や戦後復興が進む社会からも孤立した日本軍未復員兵士は、いわば人間の存在そのものが戦争遺跡になってしまったともいえる。

近年では戦争の記憶の継承という観点で、戦争遺跡が注目を集めつつある。しかし、国内にある戦争遺跡は、基地・砲台・壕・空襲被爆関連などが目立ち、戦争の加害と被害の両面を把握するためには多くの課題が残る。そこで筆者は、侵略戦争を遂行した日本帝国期の全体主義体制の景観を把握する観点から、(1)戦闘関連、(2)軍事統制関連、(3)思想統制関連、(4)経済統制関連という4種類に戦争遺跡を統合する分類案を提示した（伊藤 2018・2019）。西光寺納骨塔は、戦時中の軍事医療体系の延長上にある存在のため、(2)軍事統制に関連する事例となる。そして、西光寺納骨塔は、肥前療養所の戦争神経症兵士の加害と被害の両面にまたがる過酷な戦場体験とともに、戦後社会における戦争の記憶の大きな欠落部分の回復を可能にする重要で稀有な戦争遺跡といえる。「病床日誌」のような文字史料を除けば、「可視化」が難しい戦争神経症兵士の歴史であるが、国府台陸軍病院や武蔵療養所などについても、こうした戦争遺跡の観点から現地に残るカタチのある痕跡の把握が望まれる。

九州地方の戦争遺跡と関連博物館では、特攻隊に関連する保存整備事例が近年増えている。それらのなかには、特攻作戦やその立案・実施責任者への批判

的視点をもまったく欠きつつ、旧日本軍当時の戦争観のまま「平和学習教材」とする事例もある⁶⁾。無謀な作戦責任者の戦後の責任隠蔽と美化（加藤 2007）、特攻失敗生還者や忌避者の振武寮（福岡市中央区）での秘密裏の隔離収容と暴行（加藤 2007、伊藤 2016）、特攻隊員への覚醒剤（ヒロポン）入りチョコレート支給事例（相可 2021）などは、極限状況下で書かれた遺書と不可分の特攻作戦の本質的事実である。そもそも、無批判・無抵抗に軍神待望・英霊賛美の歓呼の声で、特攻隊員である若年世代の選択の自由や可能性を社会的に奪い、特攻機への搭乗に追い込んだのは、地域社会の「草の根のファシズム」でもある⁷⁾。それらの解明と責任所在の再認識こそが、これらの戦争遺跡の活用と平和学習の場でもっとも必要である。

戦争神経症は、現在の問題でもある。関東・関西地方に比べて九州地方では、中等教育修了後の限られた就職先選択肢の一つとして自衛隊はより一般的である。その一方で、安倍晋三政権による憲法違反の疑いが強い2014年の集団的自衛権の解釈変更閣議決定や2015年の安保法制制定により、自衛隊の海外派遣の範囲や可能性が以前よりも格段に増している。実際に、派遣先のイラクや南スーダンから帰還した自衛官の心的外傷や自殺は、すでに大きな社会問題である（高遠編 2021）。防衛大学校における旧日本軍の慣行を彷彿とさせる私的制裁などで、福岡県出身の学生が心身に被害を受けた事件（防衛大学校人権侵害裁判・2016～2020年）も、記憶に新しい。

旧日本軍は、国民の目から注意深く戦争神経症の存在を隠し、満州事変（九一八事変）以降の皇軍意識の高唱と〈日本精神〉の強調の流れの中で、表向きには「日本軍には恐怖・不安が原因で戦争神経症になる将兵はいるはずもない」（中村 2018：62頁）としていた。そして、現在の陸上自衛隊における戦争神経症対策研究でも、この旧日本軍の表向きの見解がほぼ継承された例がある（中村 2018：3頁）。

アジア太平洋戦争における旧日本軍兵士の戦争神経症に関する歴史と記憶の継承は、現代日本社会にとっても今日的意義がある切実な課題である。

註

- 1) 「〈戦争遺跡〉調査、県内全都市町〈実施していない〉定義や調査基準なく〈困難〉」『佐賀新聞』2020年8月4日付

ちなみに、九州・沖縄各県の戦争遺跡に関する主要な文献としては、以下があげられる。現在のところ、佐賀県の戦争遺跡について体系的にまとめた文献は確認できない。

福岡県

伊崎俊秋・小川泰樹編 2020『福岡県の戦争遺跡』、福岡県教育委員会（福岡）／川口勝彦・首藤卓茂 2010『福岡の戦争遺跡を歩く』、海鳥社（福岡）／花田勝広 2020『北部九州の軍事遺跡と戦争資料：宗像沖ノ島砲台と本土決戦』、サンライズ出版（滋賀）／小野逸郎編 2016『北九州の戦争遺跡』改訂版、北九州平和資料館をつくる会（福岡）／下川眞剛・諸岡研介ほか編 2000『大牟田・荒尾の戦争遺跡ガイド』、大牟田の空襲を記録する会（福岡）

熊本県

堀浩太郎ほか（熊本の戦争遺跡研究会）編 2010『戦後65年 熊本の戦争遺跡』、創想舎（熊本）／高谷和生 2020『くまもとの戦争遺産：戦後75年 平和を祈って』、熊日出版（熊本）

長崎県

原爆被爆者援護課編 2011『長崎県の戦争遺跡と戦没者慰霊碑』、長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課（長崎）／奥野正太郎・弦本美菜子編 2016『長崎原爆遺跡調査報告書』（1）、長崎市原爆被爆対策部被爆継承課（長崎）

大分県

神戸輝夫編 2005『おおいたの戦争遺跡：要塞化された大分の全貌』、大分県文化財保存協議会（大分）

宮崎県

福田鉄文 2010『宮崎の戦争遺跡：旧陸・海軍の飛行場跡を歩く』、鉦脈社（宮崎）／「八紘一字」の塔を考える会編 2015『新編石の証言：「八紘一字」の塔「平和の塔」の真実』、鉦脈社（宮崎）

鹿児島県

鹿児島県考古学会編 2016『鹿児島考古』第46号（特集：鹿児島の戦争遺跡）、鹿児島県考古学会（鹿児島）／八巻 聡 2000・2005『鹿児島県の戦争遺跡』航空基地編・本土決戦編1、私家版（鹿児島）／杉原洋ほか編 2006『記憶の証人 かごしま戦争遺跡：戦後60年』、南日本新聞社（鹿児島）

沖縄県

沖縄県立埋蔵文化財センター編 2001・2002・2003・2004・2005・2006『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査』Ⅰ南部編・Ⅱ中部編・Ⅲ北部編・Ⅳ本島周辺離島及び那覇市編・Ⅴ宮古諸島編・Ⅵ八重山諸島編、沖縄県立埋蔵文化財センター（沖縄）／沖縄県立埋蔵文化

財センター編 2015『沖縄県の戦争遺跡：平成 22～26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書』、沖縄県立埋蔵文化財センター（沖縄）／吉浜忍ほか 2007『沖縄の戦争遺跡』、沖縄県平和祈念資料館（沖縄）／沖縄県高教組教育資料センター『ガマ』編集委員会編 2013『ガマ：沖縄の戦跡ブック』改訂版、沖縄時事出版（沖縄）

また、以上のほかに九州・山口地区の戦争遺跡に関しては、「空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会」が、ほぼ毎年報告集を刊行し、新事例などが報告されている。

- 2) 佐賀県の戦争遺跡および関連資料については、江浜明德 2012『九州の戦争遺跡』（海鳥社）では、鳥栖市にある特攻隊関連の「月光の夏」のピアノ、吉野ヶ里町の陸軍目達原飛行場跡と特攻隊員宿舎の西往寺、伊万里市の川南（浦之崎）造船所跡の 3 例を紹介している（同書 105-112 頁）。また、江浜明德 2018『九州の戦争遺跡（新装改訂版）』（海鳥社）では、鳥栖市の「月光の夏」のピアノと、有田町の「焼き物の里有田町と戦争」と嬉野市の「焼き物の里塩田町と戦争」について取り上げている（同書 95-102 頁）。
- 3) 小論中の「戦争神経症」は、アジア太平洋戦争の戦場に関連した経験で現代の精神医学でいう心的外傷（トラウマ：psychological trauma）を負い、心的外傷後ストレス障害（PTSD：Post Traumatic Stress Disorder）などになった精神疾患（精神障がい・精神障害・精神障碍）を指す。戦中当時またはおもに戦後間もない頃の診断名（病名）では、戦争に関連して認定された心因性疾患の臆躁病（ヒステリー）・反応性精神病・神経衰弱などが戦時（戦争）神経症に該当する（清水編 2006, 細潤 2021）。また、中村江里氏の研究（中村 2018：283 頁）では、内因性疾患である精神分裂病（統合失調症）として診断された例でも、戦争に具体的に関連した幻視・幻聴症状を示す患者例は心的外傷後ストレス障害にかかわる可能性を示唆している。蟻塚亮二氏も、沖縄戦のストレス・沖縄戦トラウマ（心的外傷）によって統合失調症の発病が誘発された可能性を指摘している（蟻塚 2014：250-255 頁）。そこで、こうした戦争に具体的に関連する症状を示す統合失調症診断例も、便宜的に「戦争神経症」と一括することにする。ただし、煩雑さを避けるため、表題と以下の本文中では括弧を省略する。
- 4) 国立肥前療養所医師による戦争神経症関連の研究成果としては、『創立三十周年記念誌』に以下の学会発表題目が列記されている（鮫島ほか編 1978：119-120 頁）。しかし、その具体的な内容については今回把握できなかった。

倉光正之：復員者及引揚者の精神分裂病に関する調査、第 44 回日本精神神経学会九州地方会（1947）

今泉恭二郎：戦地の精神障害の病後歴、福岡精神科集談会（1949）

- 5) 送還困難な戦場で精神疾患を発症した日本軍兵士の場合、他の戦傷病者と同じく、戦闘遂行に「役立たない」または「邪魔」という理由で、治療の放棄のみでなく射殺などの「処置」対象者になった事例も知られる（中村 2018：115-116 頁）。
- 6) たとえば、知覧特攻平和会館ホームページに掲載公開されている同館編『中学生・高校生のための事前学習資料』（2021 年 9 月 18 日閲覧）などがあげられる。

7) 軍国主義・「草の根のファシズム」や侵略戦争に抵抗した人々の記憶も、改めて正当な評価と継承が必要である。ちなみに、治安維持法により反戦活動や民主化運動などを理由に逮捕され、特高警察の過酷な取り調べで深刻な身体的・精神的損傷を負った日本共産党員は、東京府立松沢病院（東京都世田谷区・現東京都立松沢病院）に多く収容されていた。それらの患者は、「治安維持法精神障がい」として一般的な拘禁精神病とは症状の激烈さで区別できるほどであったことを、同病院の医師であった秋元波留夫氏が、当時の診察経験を基に指摘している（秋元 2002, 秋元・清水 2006：22-23 頁）。

引用・参考文献

- 相可文代 2021 『「ヒロポン」と「特攻」女学生が包んだ「覚醒剤入りチョコレート」：梅田和子さんの戦争体験からの考察』, 私家版（大阪）
- 秋元波留夫 2002 「第 32 講 治安維持法と拘禁精神病」, 『実践 精神医学講義』：766-783 頁, 日本文化科学社（東京）
- 秋元波留夫・清水寛 2006 『忘れられた歴史はくり返す：障害のある人が戦争に行った時代』, KS ブックレット No.9, 萌文社（東京）
- 浅井利勇編 1993 『うずもれた大戦の犠牲者：国府台陸軍病院・精神科の貴重な病歴分析と資料』, 国府台陸軍病院精神科病歴分析資料・文献論集記念刊行委員会（千葉）
- 蟻塚亮二 2014 『沖縄戦と心の傷：トラウマ診療の現場から』, 大月書店（東京）
- 伊藤慎二 2016 「福岡市中央区薬院の戦争遺跡：陸軍振武寮とその周辺」, 『国際文化論集』第 30 巻第 2 号：35-64 頁, 西南学院大学学術研究所（福岡）
- 伊藤慎二 2018 「西南学院大学構内の戦争遺跡：戦時下の松脂採取痕跡を中心に」, 『国際文化論集』第 32 巻第 2 号：141-181 頁, 西南学院大学学術研究所（福岡）
- 伊藤慎二 2019 「日常風景のなかの戦争の痕跡：西南学院の戦争遺跡を歩く・記憶する」, 『戦争を歩く・記憶する』：199-226 頁, 朝日出版社（東京）
- 鬼嶋淳・吉岡剛彦監修 2016 『刻む：佐賀・戦時下の記憶』, 佐賀新聞社（佐賀）
- 加藤 拓 2007 「沖縄陸軍特攻における「生」への一考察：福岡・振武寮の問題を中心に」, 『史苑』68 巻 1 号：61-89 頁, 立教大学史学会（東京）
- 桜井凶南男 1966 「2. 竹田陸軍病院小史」, 『第二次世界大戦における精神神経学的経験：国府台陸軍病院史を中心として』：74-79 頁, 国立国府台病院（千葉）
- 鮫島健ほか編 1978 『創立三十周年記念誌』, 国立肥前療養所（佐賀）
- 清水寛編 2006 『日本帝国陸軍と精神障害兵士』, 不二出版（東京）
- 諏訪敬三郎編 1966 『第二次世界大戦における精神神経学的経験：国府台陸軍病院史を中心として』, 国立国府台病院（千葉）
- 高遠菜穂子（海外派遣自衛官と家族の健康を考える会）編 2021 『自衛官と家族の心を守る：海外派遣によるトラウマ』, あけび書房（東京）
- 武廣勇編 1982 『東脊振村史』, 東脊振村（佐賀）

- 中村江里 2018『戦争とトラウマ：不可視化された日本兵の戦争神経症』, 吉川弘文館（東京）
- 橋口 茂 1950「精神病を伴詐せる2例」, 『医療』第4巻第8号：455(31)-458(34)頁, 国立医療学会（東京）
- 平野誠ほか編 1996『創立50周年記念誌』, 国立肥前療養所（佐賀）
- 細渕富夫 2021「第1章 アジア・太平洋戦争と戦争神経症」, 『自衛官と家族の心を守る：海外派遣によるトラウマ』：28-50頁, あけび書房（東京）
- 溝部 竜 1998「史料紹介 市ヶ谷台史料」, 『防衛研究所戦史部年報』創刊号：82-84頁, 防衛研究所戦史部（東京）
- 吉田 裕 1997「敗戦前後における公文書の焼却と隠匿」, 『現代歴史学と戦争責任』：127-130頁, 青木書店（東京）
- 吉村 正 1966「18年間入院していた精神分裂病者を社会復帰させた経験」, 『医療』第20巻第5号：485(87)-489(91)頁, 国立医療学会（東京）